

市原の明智光秀末裔伝説

2023 年 10 月 30 日

我部山 民樹

1. はじめに

数年前、「広報いちはら」で「明智光秀の嫡子・十五郎光慶（みつよし）が市原市不入斗（いりやまず）の西光院で暮らしていた、その墓もある。」という「いちはら市民特派員」の記事を読んだ記憶があった。その時は「まさか？」と思い、本気にしなかった。その後、我が家から徒歩で 30 分足らずのところにある西光院に行ってみたが、それらしき墓が見当たらなかった。このことをすっかり忘れていたが、最近になり、墓は別の場所にあると分かった。当然、墓が西光院にあるはずだと思いこんでいたためだろうか、元々別の記事だったのに一つの記事だったと混同してしまった。全くの記憶違いだった。

市原の地方史研究家・大室晃氏の「伝明智光秀側室の墓」を読んだ後、お墓を見に行った。外観上は江戸初期建墓のようで、光秀側室とその子の墓を彷彿させる。大室氏の著作を精読し、確かに光秀の子孫が、この市原で脈々と続いていたということに信憑性を感じたが、それを確定できる史料が無いのでタイトルに伝説を入れた。

○周辺の地図



西光院



大室晃氏の著作「伝 明智光秀側室の墓」（「市原地方史研究 10 月号（1890 年）」）を読んで、

【宣教師ルイス・フロイスの「明智光秀の嫡男・十五郎光慶（みつよし）は坂本城で自害したとされているが、逃げたという説もある。」との記述より、十五郎が坂本城で落命していなくて、その後も生存していた可能性があるとした。①「土岐重五郎と母・ふさ」の墓碑銘のある墓、②光秀の子孫と名乗る鈴木氏の談話、③光秀側室の上総国市原郡不入斗までの逃亡を護衛した秀光の家臣・齋藤利満（としみつ）・利治（としはる）親子の子孫を名乗る齋藤氏の談話をふまえて、墓碑銘に母ふさの法号に明智の字があることから「ふさ」が光秀側室であり、光秀が十五郎を上総国市原郡不入斗（いりやまず）の西光院に逃亡させるときに、光秀が愛妾「ふさ」を侍女としてつけたとした。西光院にたどり着いた「十五郎」と「ふさ」は親子として暮らした。従い、墓碑銘の「土岐重五郎」は光秀の嫡子・十五郎であり、その子孫が現代まで脈々と続いている。ただし、重五郎がふさの子ではないかとの疑問が残る。】と理解した。

興味を覚えたので、再び不入斗の西光院を訪れ、そして不入斗の「奥方の墓」（漠然とそのように呼ばれている）を訪れてみた。外観は相当古くて、建墓の時期は江戸時代初期を彷彿させるものだった。

後で説明するが、墓碑銘および大室氏が収集したゆかりの人の談話には作為が感じられないし、矛盾を感じない。当時の市原に明智家の事情に明るい人物がいなければ、このような墓や談話を残せないはずである。それに創作するなら、例えば、光秀子孫を名乗る家には光秀の形見が残されているとか、伝承に齋藤利満親子は光秀の筆頭家老齋藤利三（としみつ）の血縁であったとか、側室逃亡の

護衛ではなく十五郎逃亡の護衛が主目的だったとかの話を加えていてもおかしくない。

談話には十五郎のことは触れていない。

墓碑銘と談話が矛盾なく繋がっていることから、光秀末裔の信憑性が高いと思った。ただ、嫡子十五郎光慶が坂本城落城後も生存していたという話にも疑問があるし、齋藤氏の談話にも十五郎の名が出ていないので、十五郎が不入斗まで逃げてきて西光院で暮らしたかどうかについては疑問が残った。

光秀は愛妾「ふさ」が懐妊したのを知り、生まれる子が男子であれば、秀吉軍に殺されてしまうだろうし、生き残ればお家再興も期待できる。そこで家臣の齋藤親子に命じ、ふさの方を逃げ延びさせた。そして逃亡先の西光院で「ふさ」に男子が生まれ、明智家を偲んで「土岐重五郎」と名付けた可能性を容易に想定できるからだ。

それらを紹介し、私見も述べたいと思う。

2. 明智光秀一族

先ず、明智の家族を調べる。

資料によれば

【明智光秀は本能寺の変で主君織田信長を討ったので、悪逆非道の謀反人として、後世に悪名を残した。その出自、前歴、子孫、裏切りの理由など不明なことの多い謎の人物である。生存説もあるが、一般的には光秀は坂本城を目指して落ち延びる途中、小栗栖（現・京都市伏見区小栗栖）において落ち武者狩りで殺害された、または落ち武者狩りの百姓に竹槍で刺されて深手を負ったため自害し、股肱の家臣・溝尾茂朝に介錯させ、その首を近くの竹藪の溝に隠させたとされる。『兼見卿記』によれば、「光秀のものとされる首は、発見した百姓により翌日、村井清三を通じて信孝の元に届き、まず本能寺でさらされた。その後同月 17 日に捕まり斬首された齋藤利三（としみつ）の屍とともに京都の栗田口（現・京都府京都市東山区・左京区）に首と胴をつないでさらされた後、同年（1852 年）6 月 24 日に両名の首塚が栗田口の東の路地の北に築かれた」と。

明智光秀

光慶の父・明智光秀は清和源氏の土岐氏（美濃国の守護大名）の支流明智氏の生まれで、美濃国の出身とされているが、光秀に関する信憑性が高い記録が殆どなくその生涯は謎が多く、享年でさえ、通説では 55 歳とされているが、「明智軍記」（誤りが多いとされている）では享年 55 歳と記述しているだけで、その確証がないほどである。

	家系についても同様であり、高柳光寿氏は著書「明智光秀」で「特に系図については信用できるものは全くない」とまで言い切っている。
妻 熙子	
長女（明智秀満の妻）	光秀の妻は妻木勘解由左衛門範熙の女・熙子（ひろこ）であり、子供で確実視されているものは、男子は嫡子十五郎、他 1 名（名は不明とも光泰ともいわれる）の 2 名、女子は明智秀満（光秀の重臣）の妻、織田信澄（織田氏の連枝衆）の妻、細川忠興の妻の 3 名である。（左表）
二女（織田信澄の妻）	
三女（細川忠興の妻）	
長男：十五郎（光慶）	長男・十五郎を通説では光慶（みつよし）としているが、光慶の名は「明智軍記」に現れるだけであり信憑性には疑問視もされている。
次男：十次郎定額（光泰とも）	十五郎は、本能寺の変後は坂本城で西国防備にあたったが、 坂本城で自害した（亀山城で自害との説もあり。） とされている。城攻めした高山重友らに斬られたとの説もある。次男も自害したと言われている。
（三男：乙寿丸とも）	
	十五郎に関する記録も少ないが、以下が知られている。
	・本能寺の変の直前に愛宕山で行われた威徳院連歌での結句を詠んだ
	・光秀が細川親子への勧誘の手紙の中で「近畿を平定後は 十五郎に天下を譲り 、自分は隠居する・・・」と記されている
	・フロイス（当時の日本でのキリスト教宣教師）の天正 10 年（1582 年）10 月付の手紙に「坂本城落城の際に明智の 2 子はそこで死んだという。長子（十五郎）は十三歳で、欧州の王侯とも見える優美な人であった。彼らは今日までも現れないから、 噂通りに死んだと思われるが、逃げたという者もある。 」と書かれている。

光秀の子供たちのその後をまとめると

○長子・十五郎

- ・坂本城で自害したとの説
- ・光秀の敗死を知った明智秀満（娘婿）が光秀の妻子を刺殺したとも。

・坂本城落城の際に、明智の男子の二子はそこで死んだ。逃げたというものあり（宣教師ルイス・フロイス）。または城攻めした高山重友らに斬られたともいわれる。

・亀山城で自害したとの説もある。

・十五郎は生き延びて、京都の妙心寺で得度し、玄珠と名乗った

・十五郎が千葉縣市原市不入斗に逃げ延びた

ここに【「奥方の墓」と呼ばれる墓がある。墓碑に「ふさ」と「土岐重五郎」の名があり、これは「光秀側室・ふさの方」と「光秀の長子・明智十五郎」の墓であるとし、光秀敗戦の後、ふさの方と、十五郎は不入斗まで逃れてきた。】との説である。（市原の郷土史家・大室晃氏による 1980 年の市原地方研究史 10 号「伝明智光秀側室の墓」より）

・明智光秀の長男・明智十五郎（光慶ともいわれる）が大隅の曾於郡大崎町永吉に逃れ、柳別府という姓を名乗って生き延び、その子孫は現在も当地に住んでいるという伝承があることが、「大隅史談会」で話題になっている。（2021 年の大隅史談会の機関紙「大隅」64 号による）

○次男・十次郎定額（光泰（みつやす）とも）

坂本城で自害したといわれる

○長女

明智光秀の重臣・明智秀満（ひでみつ）の妻

○次女

織田氏の連伎衆・織田信澄（おだのびすみ）の妻

○三女

細川忠興（ただおき）の妻

細川ガラシャ

3. 光秀側室の墓といわれる墓とゆかりの人の談話

市原市在住の郷土史家・大室晃氏の著書「伝明智光秀側室の墓」（1980 年）による。その著書のはじめに、

【千葉縣市原市不入斗に「明智光秀側室の墓」があるという噂が立ったのは、戦後十数年を経てからのことである。しかしそれも、地元の極一部の郷土史家が知ったにすぎず、格別の話題に上ることもなく今日に及んだ。筆者がその墓碑を知って興味を覚えたのは、戒名の一部に「明智」とあったこと、またその下に横書きで「土岐重五郎」という、光秀嗣子の名（十五郎）などを認めたからである。墓は二基あるが、いずれも時代はよさそうである。先ず長い間沈黙を守ってきた、ゆかりの人々から話を聞いてみた。】とある。

また【最近になってこのことが分かったのは、明智光秀の子孫は身の危険を感じながら潜伏生活を送っていた。墓を調べてみて、ゆかりの人たちから談話を聞き、「明智光秀の子孫であることを殊更秘匿しようとしながらも、明智家の家名を表示しておきたいという矛盾した子孫の気持ちが滲み出ている。」と感じた。子孫は「光秀の子孫」であることを誇らしげに子弟に語りながら、最近まで外部に口を固く閉ざして語らなかった。郷土史研究の人たちが知ったのは、終戦後十数年を経て、日本史が根底から見直される中であってからのことである。】と。

（１）明智光秀の子孫を名乗る市原市不入斗の鈴木貞男氏と鈴木千代さんの談話（要旨）

○鈴木貞男氏

・自分の家は明智光秀の子孫で、七代目の分家である。

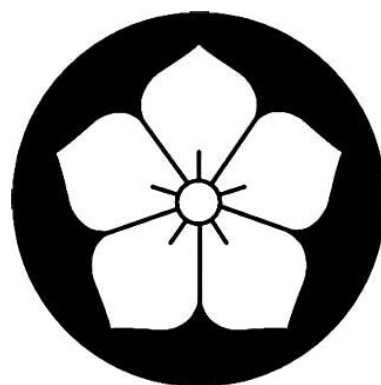
本家は十一代の輝さんのときに血統が途絶えた。私の祖父・定吉の弟・千代吉さんが本家の後を継いだ。

・今本家は千代吉さんの娘・ていさんが信次さんを婿に迎えて電気商を営んでいる。

・私の祖母・いさは、側室の墓のことを「無縁仏だが、もとはうちの先祖だった。」と話していた。本家にも私の家にも、古文書のようなものは一切ない。



明智家の桔梗紋



○鈴木千代（千代吉夫人）さん談話

先祖の書物に、表紙に「年代記」と書いてあった帳面があった。桔梗紋がついていて、十一代までの系図が書いてあった。神棚にのせておいたら、いつかネズミに引かれたらしく、今はない。私の義父・源四郎（夫・千代吉の父）はよく、「うちは明智の子孫だ。」とか、「鯛は腐っても鯛だ。」などと話していた。十代の源六さんは、1人娘・輝さんが亡くなると、これで明智の家も終わりだ、と思ったらしく、**祖先の位牌を、まとめて川に流してしまった。**今は輝さんの野辺送りに使ったものしかない。

(2) 市原市片又木（かたまたぎ）の齋藤徳利氏および齋藤義幸氏の談話
お二人は光秀側室・ふさの方を市原郡不入斗まで護衛して来たという光秀の家臣・齋藤利満（としみつ）と利治（としはる）親子の子孫を名乗っている。

齋藤徳利氏は片又木の齋藤家の本家で、義幸氏は徳利氏の父親の弟である。（片又木のほとんどの人が齋藤さんである。）

個別に聞いたお二人の談話の共通点で妥当と思われる部分をまとめると

- ・本能寺襲撃軍の中に、先祖の齋藤蔵之介利治（としはる）がいた。
- ・利治は肥前（佐賀県）の出自で、明智光秀の参謀格だった
- ・秀吉軍との戦いに敗れたときには奥方（齋藤氏は妾とはいわず奥方と呼んだ）は上総に逃亡することになっていて、私の祖先が護衛することになっていた。蓑をつけて逃亡した。
- ・逃亡の途中、利治の父・利満は、江戸の戸塚っ原で捕えられて殺された。奥方は剃髪して尼姿となり、逃亡したので助かった。
- ・利治と奥方は別かれ別かれになってしまった。利治には家来が一人ついてきた。
- ・奥方は市原郡不入斗村永藤（いりやまずむらながふじ）の西光院に入った。
- ・利治はその近くの市原郡片又木村に居を定めた。利治は慶長十五年（1610年）九月に没した。
- ・本能寺の変のとき、利治は黒馬に乗り出陣したとのことで、私の家では代々黒馬を飼うことを禁止されている。黒馬ばかりか、黒毛の動物は一切飼ってはいけないことになっている。
- ・利治の墓は江戸城修復のときに持ち去られた。

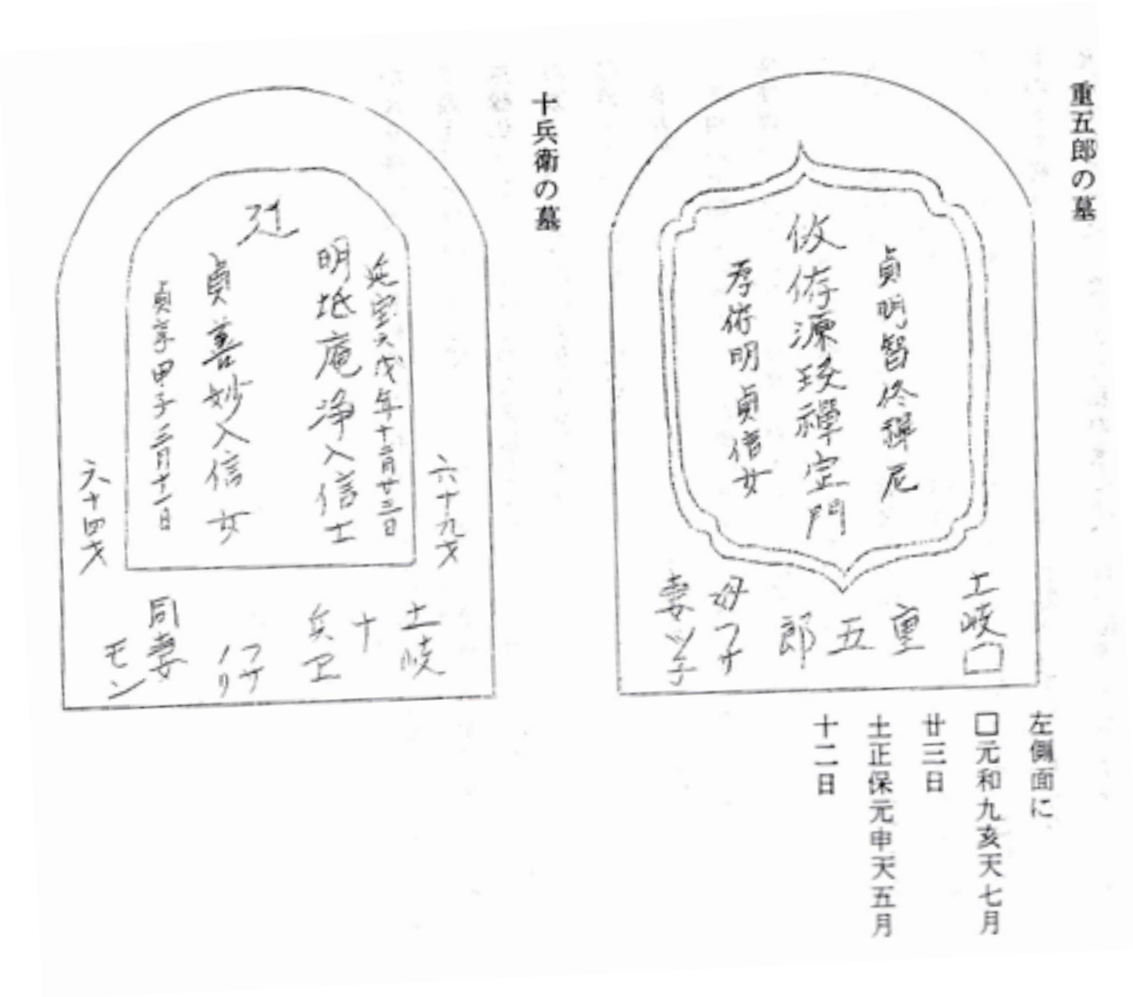
4. 奥方の墓といわれる墓と大室氏の推論

○奥方の墓

不入斗の富士石油独身寮建設のとき、50メートルほど南の現在地に移された。墓地にある二基を漠然と、奥方の墓と称している。両基とも高さ約四十八センチ

メートルという小柄だが、当時の墓石としては、格式のあるものといえよう。「重五郎の墓」、「十兵衛の墓」として紹介したい。

重五郎の墓



重五郎のお墓には三つの戒名が刻まれている。その下には土岐□重五郎、母フサ、妻ツ子（ね）とある。

隣には重五郎の息子フサノリとその妻モンのお墓で「明（めい）ち（※）庵淨入信士 貞善砂入信女」と刻まれて、下には「土岐十兵エ」と刻まれている。

□；不明な部分

※「ち」は土へんに氏

○大室氏の推論

【土岐重五郎は側室のふさの方の子としても光秀の息子である。重五郎がふさの子ではないかとの疑問が残るが、明智光秀の嫡子・十五郎とみる。

その理由は（要旨）

・光秀が、細川藤孝・忠興に与えた覚書に「五十日～百日のうちには近江国を平定し、地盤を確立したら、十五郎（光秀嫡男子）や与一郎（忠興）らに引き渡して隠居するつもりである。」この十五郎という通称を例え重五郎に変えたとしても、側室の子がそれを称えるとは思わない。

・重五郎と名前を変えて十五郎一行が上総に逃亡するとき、あまりの大人数では目立つ。齋藤利満親子に、従者一人、それに侍女として愛妾の一人ぐらいをつけることぐらいは、考えられないこともない。逃亡途中、齋藤利満は捕えられ殺された。不入斗についてからも身の危険を感じ、薄氷を踏む思いで、（中略）時が時だけに実の母子のような強い絆で結ばれていたので、「ふさ」を母上と呼んでも不自然ではなかろう。

その側面には「（梵字）元和九亥天（1622年）七月廿三日」とあるが、ふさの方の没年と推測される。正保元年（1644年）は重五郎の没年と考えられる。光秀の没年は天正十年（1582年）であるから、生保元年（1644年）までには六十二間ある。従って重五郎は、光秀晩年の子供と推考される。明智氏は美濃の守護土岐氏の支族、土岐氏は源氏の出身である。

戒名

重五郎の戒名；□（ゆう）□（ぜん）源□禪□門（筆者は手書き部分の字は細かくて読み取れないので、戒名に対する推論を再現できない。原文を参照ください。）

妻のふさの戒名；貞明智□禪尼（□はニンベンに冬と手書きで書いている）

ふさの法号は禪尼とあり出家したとの伝承と合致し、「明智」の文字が含まれている。「ふさ」はゆかりの人の談話にある光秀側室のことである。】

明智光秀夫婦は相思相愛で、明智光秀は、明智熙子以外に側室を持たず、お互いにとても大切にしたとも言われているが、史料に側室の名

が残っていないということではなかろうか。当時は子孫を残さなければならなかったのが光秀に側室や愛妾がいたとしても不思議ではなかろう

5. 墓を訪れる

この階段を登ると坂があり、ほんの30秒くらいで林に囲まれた墓地にたどり着く。



○光秀側室の墓と光秀の子孫の墓



後ろ側に重五郎の子孫の墓があり、明智の家紋の桔梗紋が刻まれた墓もある。大室氏によると

【四代から八代に到る間の墓石には明智氏を偲ばせるようなものはない。この時期には、既に徳川政権が確立しており、明智氏も再起の望みを絶ったのであろう。ところが九代明徳の墓石に到ると、突然明智を思わせる墓碑銘が出現する。明徳の戒名は「義惜院智量道喜信士」であるが、戒名の上に明智の紋所桔梗を彫

しているのである。明徳は1855年9月15日（徳川十三代将軍家定の時代）、55歳を以て没したが、この墓を建てた人は、江戸柳原の近江屋庄左衛門・同新蔵である。近江屋は、明徳が光秀の子孫であることを知って建墓を申し出たのであろう。光秀は近江国滋賀郡を領していた。近江屋は、この近江国の出身と思う。】と。

「奥方の墓」の左側に鈴木家の墓があり、やはり桔梗紋が刻まれている。

6. 墓の墓碑銘と齋藤徳利氏および齋藤義幸氏の話をもとめる

年 度	墓の墓碑銘および 光秀の子孫、齋藤 利治の子孫と名乗 る人たちの談話	大室晃氏の推論また は他の文献	疑問点と私見
1569 年	光秀の長子・明智 十五郎生まれる。 (1582 年、享年 13 歳として逆算)		
1582 年	・6 月 21 日の本能 寺の変後、光秀死 去。 光秀は坂本城を 目指して落ち延 びる途中、小栗栖 (現・京都府京都 市伏見区小栗栖) において落ち武 者狩りで殺害さ れたとも、落ち武 者狩りの百姓に 竹槍で刺されて 深手を負ったた め自害し、股肱の 家臣・溝尾茂朝に 介錯させ、その首 を近くの竹藪の		

	溝に隠したとの説もある。股肱の臣といわれた齋藤利三(としみつ)は捕えられ、市中引きまわしの上、六条河原で斬られたとされる。 ・長子・十五郎(光慶)と次男は坂本城落城で自害(高山重友らに殺害されたとも)だとしたされるが、宣教師ルイス・フロイスは今日までも十五郎が現れないから、噂通り死んだのであらうと思われるが、逃げたという者もある。」と書き残している。 ・秀吉軍との戦いに敗れたときには奥方(齋藤氏は妾とはいわず奥方と呼んだ)は上総に逃亡することになっていて、私(齋藤氏)の祖先が(奥方を)護衛することになっていた。蓑をつけて逃	・墓の名の土岐重五郎が明智十五郎として、光秀側室・ふさの方と一緒に不入斗の西光院に逃げ延びたと推論。	
--	---	---	--

	亡した。逃亡の途中、利治の父・利満（としみつ）は、江戸の戸塚っ原で捕えられて殺された。奥方は剃髪して尼姿となり、逃亡したので助かった。 ・利治と奥方は別かれ別かれになってしまった。利治には家来が一人ついてきた。 ・奥方は市原郡不入斗村永藤（いりやまずながふじ）の西光院に入った。		・一行は明智の残党として手配され、捕えられたのであろう。若くて素早い利治は逃げて、追っ手はもともと尼僧を捕えるつもりがなかった。齋藤氏の伝承には、十五郎が同行したとの話が出てこない。それに同行していたなら、真っ先に捉えられ、斬られたはずである。一緒にいなかったと解釈するのが自然であろう。家族限りの伝承なので、隠す必要性は考えられない。 ・何故、市原郡不入斗に逃げてきたのか？ 剃髪していた奥方はお寺関係の紹介でとりあえず西光院を目指したのだろうか？ （明智家は土岐一族の支流なので、もしかしたら上総国夷隅郡の万喜城の土岐氏を頼って逃げてきたのだろう
--	--	--	---

	・齋藤利治は片又木に居を構えた ・		との憶測もあるようだ。) ・利治は側室の住む西光院の近くに居を構え、農民？として過ごししながら、側室親子を見守りながら、生活の支援したのだろう。
1590 年	万喜城が秀吉軍に攻め滅びされ、土岐氏滅亡		
1610 年	・9 月、齋藤利治没。その墓は江戸城修復のときに持ち去られた。 ・土岐重五郎の息子土岐十兵衛フサノリ生まれる。(墓の墓碑銘より、逆算して)	・齋藤徳利氏に墓に案内されたが、江戸初期の墓は無かった。	・重五郎が光慶とすれば、フサノリは 41 歳のときの子供となる。ふさの方が光秀の子を宿していて、西光院で生まれた子が重五郎とすれば、フサノリは重五郎 28 歳のときの子である。(長子だろうから、年齢的には 28 歳くらいの可能性が大？絶対ではないが。)

1622 年	ふさの方没		・徳川二代将軍秀忠の時代
1644 年	重五郎没		・徳川三代将軍家光の時代 ・重五郎が光慶であれば、75 歳で死没したことになる。西光院で生まれた子が重五郎であれば 62 歳で死没したことになる。
1678 年	土岐十兵 フサノリ、69 歳で没		・徳川四代将軍家綱の時代
1855 年	不入斗の土岐家第九代明德没		徳川第十三代家定時代

7. 検証

・建墓の年代は分析にかけるとはっきりするのだろうが、そうしなくても外観と墓碑銘の没年から、江戸初期の建墓としてよいであろう。

確かに明智の末裔と分かれば、身の危険が迫るし、悪逆非道の謀反人の一族と分かれば安住の地は無くなってしまうので、世間には明智光秀の一族であることは絶対に伏せなければならない。しかし、明智の末裔であることをどうしても後世に残そうと名前や墓碑銘に苦心したことであろう。墓碑銘と談話を素直に解釈すれば、明智光秀（通称十兵衛）や明智光慶（通称十五郎）が死没したことを知っている光秀側室「ふくの方」が明智光秀を偲んで、また我が子が光秀の子であることを後世に残そうとし、姓は明智家出身の土岐姓を使い、名前は嫡子・十五郎の名を借りて我が子に土岐重五郎と名付け、さらに孫には明智十兵衛光秀の名を借りて土岐十兵衛と名づけたとするのが妥当では、なかろうか。しかしながら、光秀の嗣子・十五郎が西光院に逃げ延びた可能性も否定できない。

・鈴木家の談話、齋藤家の談話、墓碑銘にはつながりがあり、矛盾はないので、信憑性はあろう。不自然な作為は見えてこない。作為があるなら、もっともらしい家系図やストーリーを準備するだろう。例えば、十五郎と一緒に逃れてきたとか、光秀の形見の品々を準備したかもしれない。しかし、上総市原への逃亡に十

五郎の名は出てこない。光秀側室一行の上総への逃亡には明智十五郎が同行しなかったと解釈するのが妥当だろう。

奥方と利治は途中で別れてしまったが、それぞれが西光院に辿りついている。最初から行き先は明確だったという事である。行き先が何故、市原不入斗の西光院なのかについては触れていない。ふくの方は剃髪して禪尼になっているので、どこかの寺社に西光院を紹介して貰ったのか、または上総国夷隅郡の土岐氏に落ち延びる途中に西光院に立ち寄ったが、結果的にそこで生涯を過ごしたとする推測もあるようだが、いずれにしても疑問が残る。

・齋藤利満・利治親子に関しては鈴木氏の談話には出てこない。齋藤徳利氏の談話に出て来るだけである。家臣のことに触れる必要はないのかもしれないが。

利治の出自は美濃の齋藤道三でもなく、美濃齋藤出身の齋藤利三でもなく、肥前出身であるとしている。かえって齋藤徳利氏の話の信憑性を感じる。

・鈴木家に伝わる光秀の末裔伝承も信憑性があると考え。側室の墓も江戸初期に建立したものだろうし、この地の人々が、はるかかなたの京での出来事に通じているはずがない。ましてや明智家一族に関する家族構成や動向に関する情報は持ち合わせていないはずだ。このような光秀末裔伝説を創作することはできなかったはずである。

十一代当主までの「年代記」が紛失してしまったことがとても残念である。上総国夷隅郡の明智氏の出自である土岐氏の万喜城を目指した可能性はあるのだろうか？

○上総夷隅の土岐氏について調べてみる。

万喜城



資料によると

【城主・土岐為頼は里見実堯と婚姻関係を結んでいたが、第二次国府第合戦（1564 年）で里見氏が敗北すると、後北條氏と結んで離反し、以後一貫した北条方となった。このため、万喜城周辺はしばしば里見氏や上総武田氏の侵攻を受けた。特に土岐頼春（為頼の子）の代の天正 16 年（1588 年）から同 18 年（1590

年)にかけて里見氏による3度の攻勢が行われるが、いずれも土岐氏の勝利に終わっている(「万喜・長南合戦」)。だが、天正18年(1590年)の豊臣秀による小田原征伐においては北条氏に味方したことから、本多忠勝率いる徳川軍に攻め落とされ、滅亡した。】と。

西光院で土岐氏の戦況を見守っているうちに、期待に反し土岐氏は滅亡してしまったので、西光院に留まることになってしまった可能性があるのかもしれないが、最初から万喜城側はとてもし側室らを受け入れられる状況ではなかったもので、万喜城を目指していなかったと解釈するのが妥当であろう。

齋藤徳利氏の談話では最初から不入斗を目指したとしているので、その通りなのだろう。

8.さいごに

大室晃氏のおかげで、ロマンあふれる市原の明智光秀末裔伝説を知ることができた。

墓碑銘の土岐重五郎が明智光慶であるとの説はロマンもあり、その可能性は否定できないが、「側室ふさの方の子で、光秀の忘れ形見であり、その子孫と不入斗まで護衛した齋藤利治の祖孫が、脈々と続いている。」と捉えるのが妥当ではなかろうか？

根拠は

「・齋藤利治氏の子孫の伝承に十五郎の話が出てこない。西光院のご住職にも出てこない。光秀の子孫と称する鈴木家にも、重五郎の話が出てこない。門外不出の伝承であり、十五郎のことを意図的に伝承や談話から外す必要はない。伝承に出てこないのは上総への一行に十五郎が加わっていなかったからであろう。

・秀吉軍は明智家に血脈のある男子以外は殺さなかったはずなので、男子のいない愛妾が逃亡する必要はなかったはずだ。光秀がふさの方を上総に逃亡させたのは、自分の子を身ごもっていたので、生まれてくる子が男子なら、秀吉勢に捕えられて殺されると考えたからであろう。お家再興も期待したのかもしれないと解釈すべきと考える。」

である。

重五郎が光秀の嗣子・十五郎とすれば話題性はあるが、その説に拘り過ぎると後世十五郎が坂本城で死没、あるいは他所の逃亡していたことが判明したあかつきには、市原の明智光秀末裔伝説そのものが消滅してしまうかもしれない。妾腹の子であっても光秀の子孫であることに変わりはない。重五郎が光秀とふさの方との間にできた子であるとした場合の伝承は消滅してしまうことはないだろう。

重要なことは、「市原の明智光秀末裔伝説は信憑性がある。」ということだ。

逆賊非道の子孫であることを隠しながら、伝承をつないできた人々の苦労が偲ばれる。

追。調べているうち、不思議なことに「光秀の家老齋藤利三（としみつ）の子孫」を名乗る齋藤さんが片又木に在るとの記事を見つけた。それも含めて参考資料として「いちはら市民特派員」の記事3件を紹介する。

参考資料

- 「麒麟がくる」の明智光慶のお墓を訪ねて
歴史に名を刻むお墓が市原市の不入斗に！





1月19日から放送されているNHK大河ドラマ「麒麟がくる」を見ている方は多いのではないのでしょうか？

なんと！今回の主人公である明智光秀(十兵衛)の長男である光慶のお墓が、市原市不入斗(いりやまず)にあるということで、3月下旬に訪ねてきました。しかも、なんと私の家から歩いて1分ぐらい。

20年以上ずっとお世話になっている方が、ちり取りとホウキを持って坂を上げるのを度々見ていたので、まさか？と思い自宅へ伺い、「あの歴史のお墓と何か関係ありますか？」聞いたところ、

「うちの先祖ですよ」と。

まあ！驚きました。さらに案内までしてくれることに。実は、私も呼び出されたような気がして眠れませんでした。ここには、ご家族のお墓もあるということで、初めて気づいた私を待っていたらっしゃったのでは？と感じました。

お墓に着くとまずお参りをして、「ここがそのお墓ですよ！」と、いつもの優しい笑顔でお話しをしてくださいました。きれいなお花が飾られたお墓はとっても大事にされていて、ご先祖様たちも感謝していらっしゃるようでした。

写真の許可を頂き、お墓に手を合わせてから感謝の気持ちで写真を撮らせていただきました。

一番左のお墓には「フサの方」光慶、光慶の妻「ツネ」の戒名が。下には土岐重五郎、母・フサ、妻・ツ子（ね）と刻まれています。

左から2番目は光慶の息子フサノリとその妻モンのお墓で「明（めい） ち
（※）庵浄入信士 貞善砂入信女」と刻まれて、下には「土岐十兵エ」と刻ま
れています。

※「ち」は土ヘンに氏

左から3番目のお墓には「光譽（みつよし） 真性法土靈」と刻まれています。

右のお墓は、二組のご夫婦のお墓のようで、後ろも子孫のお墓が並んであり、
力強い表情の仏様も目を引きました。

なぜ、ここに？いすみ市にあった万喜城に関係があるという話もあり、歴史の
ロマンを辿ってこれからも勉強を続けたいと思っています。

ふと、市原市ふるさと文化課の職員の方の「歴史ってやはり繋がっていくんだ
なあ！」というお言葉を思い出し、ここも歴史をつなぐ市原市のフィールドミ
ュージアムとして繋がれたらと祈りました。

帰りにラーメンごちそうしてくださるとのこと、また感動！

この日は、いきなりだったので、またのお参りのときを楽しみにしてお別れし
ました。

本当に不入斗のすごさはもちろん、母親のような温かい心になおさら感激し
て、ご恩返しのためにもこれからもできるだけ心をつないでいこうと思いま
した。

○「麒麟がくる」の明智光慶とフサの方が暮らした西光院
ご住職から生の声を聞く



先日は、「麒麟がくる」の主演明智光秀の長男、明智光慶のお墓を訪ねましたが、今回は光慶と育ての母フサの方が暮らしたとされる、市原市不入斗にある西光院（真言宗院）を訪れました。



上総に落ちて

光慶（十五郎）は坂本城落城の際、家臣齋藤利満・利治親子に守られて、フサの方とともに上総に向けて脱出しました。上総への途中、利満は江戸の戸塚っ原で捕らえられ殺されたが、フサの方は剃髪して尼姿となり逃亡したので助かった。また利治とも離れ離れになってしまい、十五郎とフサの方は西光院に入り、利治は近くの片又木に居を構えたとされています。

再建碑に記載されているとおりだと、当時のお寺の存在の疑問もありますが（一旦烏有に帰し）、十五郎とフサの方が西光院に入ったということは、立派じゃないがお寺はあったのではないのでしょうか。

西光院のご住職

ご住職の土澤弘太さんに伺ったところ「家がないと住めないので、多分お寺はあったと思います。片又木にある法蓮寺も僕がみっていますが、法蓮寺にはここに西光院があって、フサの方の面倒を見ていたとの話が残っていました。」と話してくれました。

境内で一番写真を撮って欲しい場所を伺うと、本堂近いお墓がたくさん集まっているところとのこと。あちこち散らばっていたのですが地域の方々と共に一つの場所にしたそうです。感謝の気持ちがいっぱいこもっておられました。

お墓の真ん中の石仏が、なぜかフサの方と重なり、どこかで十五郎が「母上！」とフサの方を呼んでいるような気がして石仏を見つめると、お世話にな

ったこの場所を守り続けるご住職様と地域の方々に深く感謝しているようで不思議な感じがしました。

○戦国武将 斎藤利三の子孫が住むといわれる片又木
地域のほとんどの方が齋藤さん・その歴史

説明する齋藤さん



市原市の片又木に住む人の多くの苗字は齋藤さんです。NHK 大河ドラマ『麒麟がくる』との関連性はあるのでしょうか？片又木の知り合いに伺ったところ、歴史に詳しい方に話を伺うことができました。

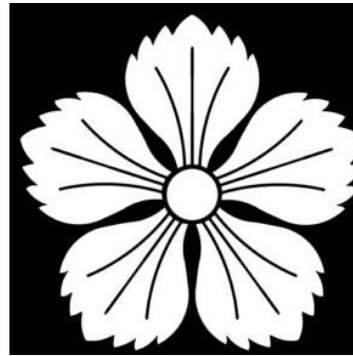


そこは、戦国武将で、明智光秀の重臣でもあった斎藤利三を先祖に持つとするお宅の齋藤さん。

お話の宝箱を開けたように生き生きと、家紋（撫子紋）や斎藤利三が万喜城主

の土岐氏を頼ってここに着いたこと、この地を選んだ理由、斎藤利三の娘である徳川政権の安定化に寄与した春日局（かすがのつぼね・お福）のこと、ここが片又木の斎藤家の本家でみんな一族であることなど、先祖から伝わっている400年の歴史を語ってくださいました。

撫子紋



その後、ご先祖である斎藤利三他の代々のお墓へ。
初代の斎藤利三のお墓の脇には、由来が刻まれている墓誌（文章は下部に掲載）がありました。
斎藤さんのお話によると、斎藤利三は逃げ場所を片又木に決めてあったとのこと。一度はお金を持ってきたが、不入斗も大多喜もすでに人が入っていたため、どこへ逃げるか事前に決めていたそうです。





1989年の大河ドラマで放送された春日局（斎藤福）の写真を見せながら「頭は良かったのかなあ」と愛着を持って笑う斎藤さん。令和4年に開館予定の「（仮称）市原歴史博物館」の開館を待ち望んでいるようでした。とても楽しんでお話しする姿を見て、多くの方々に「歴史講座」が開かれるのもよいと思いました。

片又木が素晴らしい歴史を持っていること、約400年の間、斎藤利三本家と一族の方々が強い絆でこの地を築いてきた功績にも感動しました。

墓誌

通 齋藤別当實盛ヨリ三十三代目デ当地(片又木)初代、戦国ノ武将デ島羽伏見山崎、本能寺関ヶ原ノ合戦ヲシ明智光秀ノ上家老で有り姻戚デモアッタ。慶長五年関ヶ原ノ戦デ光秀公ハ岐阜の藪川で水死シ、利三モ黒毛ノ馬ガ戦死シタ。黒毛ノ動物は運ワルシトシタ。岐阜県郡美山町西洞の山中に光秀公ヲ葬ムリ、利三は美濃ノ国ヲ後ニシ、当地(片又木)ニ渡リ領地トシタ。

通 肥前守 齋藤内蔵助利三 又ハ齋藤治郎エ門トモ伝ウ。

引用資料

- ・ 大室晃著；「伝 明智光秀側室の墓」1980 年市原地方史 10 号
- ・ 「明智十五郎の墓」
- ・ 高柳光寿著；「明智光秀」
- ・ 桑田忠親著；「明智光秀」
- ・ いちはら市民特派員；「麒麟がくる」の明智光慶のお墓を訪ねて
- ・ いちはら市民特派員；「麒麟がくる」の明智光慶とフサの方が暮らした西光院
- ・ いちはら市民特派員；戦国武将 齋藤利三の子孫が住むと言われる片又木
- ・ ウィキペディア

以上